

## 総合コメント

出田 和久

### はじめに

歴史地理学会大会で、絵図・地図が共同課題として取り上げられたのは、昭和53年4月の第21回大会における「地図と歴史地理」が最初で、『歴史地理学紀要21 地図と歴史地理』<sup>1)</sup>の序において織田武雄は、歴史地理学研究の基本的資料である絵図を含めた古地図類の重要性について、「それは、たとえ稚拙、素朴な絵図のようなものであっても、地図が地表の一部を縮小して平面に描き表わしたものである以上、それがつくられた当時の、ある一定の地域における事物の分布や配列の状態を、これを通してうかがうことができるからである」と述べている。爾来30年を経て今大会において「歴史地理学における絵図・地図」がシンポジウムのテーマとなった。この間、空間認知の問題について心理学をはじめとする諸分野における研究の活発化をうけて、第27回大会では「空間認知の歴史地理」がテーマとされ、歴史地理学研究の基本資料である古地図類に表れた空間認知に関心が注がれた。その後、絵図・地図に関する史料論的・方法論的研究の深化をうけ、歴史学や建築史学等の隣接分野における絵図・地図への関心も高まり、学際的な研究の活発化がみられる。新たな絵図・地図研究への展開が期待される研究状況が醸成されつつあるこの時期に、「歴史地理学における絵図・地図の意味を再発見すると同時に、それらを活用した新しい方法論、思想論の地平を切り開く契機となることを期待し」<sup>2)</sup>て本シンポジウムが開催

されたのは時宜にかなったものといえよう。

### 1. 歴史地理学における絵図・地図の意味の再発見

「歴史地理学における絵図・地図の意味の再発見」というテーマに関しては、近年の絵図・地図研究の流れをみると、隣接領域の歴史学・美術史などからのアプローチと分析化学、情報科学をはじめとする諸領域の研究者を交えた学際的研究からの刺戟は軽視できない。このことは、たとえば、荘園史研究における荘園絵図への関心の高まりが中世史研究者と歴史地理研究者による学際的な研究を促し、『絵図のコスモロジー 上・下巻』<sup>3)</sup>や『中世荘園絵図大成』<sup>4)</sup>が成果として現れたり、また絵図研究の蓄積が豊富で、これまでに主要な荘園絵図の写しを所蔵するなど絵図資料へのアクセスに利点を有する東京大学史料編纂所を中心とした歴史学と歴史地理学、絵画史、分析化学などの諸領域との学際的共同研究が行われていることをみれば首肯できるであろう。このような動きを受けて、オーガナイザーが指摘したように、これらの研究成果を歴史地理学がどのように受け止め、消化し、批判的に継承して、さらに再発信していくかという課題があり、今回のシンポジウムとなったといえよう。近年、歴史地理学を中心とする研究者による絵図・地図の共同研究も活発化し、その成果が公刊されているので、それらの情報が交換されることで新しい視点を生み出すことが期待され、実際に歴史地理学の側からの新たな試みもみられるよう

になった<sup>5)</sup>。このような活動の積み重ねが、「歴史地理学における絵図・地図の意味の再発見」と「新しい方法論と思想論の地平を切り開く契機」となるものと期待される。

本シンポジウムでの報告は時間軸を中心とするものであったので、以下においても時間軸を中心にして検討することにしたい。

## 1) 古代・中世

古代・中世のセッションでは、古代荘園図を資料とした三河雅弘氏と雪舟の『天橋立図』を資料とする福島克彦氏の報告の2件があった。

古代荘園図をはじめ荘園絵図を対象としたここ20年間の共同研究の積み重ねは、歴史地理学にとっては重要な成果をもたらした。それらの代表的な成果として上記の『絵図のコスモロジー上・下巻』等のほか『日本古代荘園図』<sup>6)</sup>や『西大寺古絵図の世界』<sup>7)</sup>などが生まれた。また、東京大学史料編纂所による『日本荘園絵図聚影』<sup>8)</sup>とその後の積文編<sup>9)</sup>の刊行が与えた荘園絵図研究への刺戟は大きく、特筆すべきものである。これにより、良質の絵図画像へのアクセスが格段に向上し、本日の三河氏の一連の研究を生み出したと言っても過言ではないだろう。

三河氏の報告「班田図と古代荘園図の役割—8世紀中頃の古代国家による土地把握との関わりを中心に—(旧題：古代日本における田図および荘園図の機能と表現内容)」は、班田図と古代荘園図の機能の違いを記載内容の差から、主として「田」を把握するか「地」を把握するかに求め、地内の検注や校田、さらには荘園内の私的な目的に供され、班田図や古代荘園図はその用途に応じて多様な表現内容を有していたとした。また、絵図作成にかかる直接的史料が無い中で、絵図に即して表現内容と機能との関わりを、古代荘園図の分類試案を提示しつつ検討し、班田図を基図とする荘園図作成の背景や役割を古代国家の

土地把握の実態との関わりで追究し、古代国家による地の把握の重要性を指摘した意欲的なものである。古代国家が班田図に依拠して田を中心とした土地支配を行っていたとはいえ、従来の古代荘園図研究が、田以外の地目や土地全体の把握の実態については関心が希薄であった点を補うものといえる。この三河氏の研究視角は、古代荘園図研究において多くの成果をあげてこられた金田章裕氏による整理<sup>10)</sup>に従えば、氏が4つあげられたうちの、①絵図・地図そのものを書誌学的ないし史料学的に研究する視角、④絵図・地図が表現する事象そのものの形状・位置・構図などの分析から、表現内容とその構造の解釈をめざす視角、の2つに重点があるといえる。今後、これらの視覚に加えて、地の把握に関する史料を博捜し、図との関係で具体的に検討を深めることが必要であろうが、氏の研究は、古代荘園図は古代国家の土地把握との関わりが深いことを提起し、古代日本の古地図研究における新たな視角を示したもので、絵図・地図の意味の再発見につながるものと期待できよう。このことは、古代荘園図における方格線と条里地割との関連はもとより、景観復原の資料とする場合に景観表現と認識の問題を考える際にも重要な視点となるであろう。

つぎに福島氏の「中世都市丹後府中と『天橋立図』」は、従来写実性が高く評価される雪舟の「天橋立図」<sup>11)</sup>について、景観復原の資料としての可能性について明らかにしたものである。同図が景観描写にすぐれ、中世都市丹後府中における現地調査や名所の情報を数多く盛り込み、地図的要素も併せ持っていることを明らかにし、景観復原の資料として活用できることを指摘し、絵図と絵画の定義にも関わることであろうが、絵画が景観復原に利用できることを改めて提示したものである。このことは、絵図研究において絵画的表現を読み解く際に、従来の歴史地理学におけ

る絵図研究に絵画史や図像学の視点や成果が十分に反映されていないことも関連して、絵画的色彩が豊富な絵図の読解には、図像のみならず表現方法及びその背後にある思想なども含めた日本絵画史の成果の上に解釈することが必要であることを示唆するものであり、それは絵図・地図の意味の再発見へとつながるものであろう。

## 2) 近世

最近の国絵図研究会の活動などを通じた国絵図研究の深化は注目されるであろう。尾崎久美子氏の報告「北方社会の政治的コンテクストからみた天保国絵図改訂事業—盛岡藩・弘前藩を中心に—」は、天保陸奥国津軽・南部領絵図の懸紙修正図などの注意深い観察・読解から示したものであり、礒永和貴氏が指摘する政治史的研究の必要性（後述）の方向に沿うものである。尾崎氏の報告からも伺えるように、各地に残る国絵図等の各種絵図類がどのような背景において、つまりいかなる政治的・文化的コンテクストで作成されたり写されたりしたのか、その利用や使用の実態はどのようであったのか、等についても研究の関心が深まっており、新たな視点が開けつつある。

礒永氏の報告は国絵図研究を史料論・復原研究・政治史的研究に3分類し、それぞれの動向と研究課題を概観したものである。史料論に関しては高精細画像が国絵図研究を大いに深化させたとする一方、料紙及び顔料や染料等の科学的な分析の進展が見られるにもかかわらず国絵図調査法が確立していないことや読図方法の体系的確立が必要である等問題を指摘した。史料論の成果に立つ復原研究では村や郡などの領域、交通、地形、城館、寺社をはじめとする名所旧跡などから景観や空間認識の復原について言及するとともに、尾崎論文にもみられたように政治的な意図から国によって国絵図の記載に差異があること

を正保・元禄肥後国絵図を中心に例示し、国絵図の性格と地域差さらには国絵図の記載内容の差異から国を超えた広域的意図の検討可能性を指摘し、国絵図特有の問題として特に政治史的研究の必要性を強調した。国絵図の記載内容に差異があることから地域性を見出し、絵図・地図の意味の再発見への意欲をみるができるが、それらを活用した新しい方法論、思想論の地平を切り開くまでの展望を見通すところまでは進展していないのが現状であろう。さらに、使用された料紙、顔料や染料の科学的な分析から、新たに色料といった「モノ」の貿易・流通や使用された色の有する意味など<sup>12)</sup>にも関心の広がりみられることも、絵図・地図の意味の再発見に至ることが期待される。

渡辺理絵氏の報告「城下町絵図をめぐる近年の研究動向と諸課題」は、従来見落とされてきた城下町絵図の現用資料としての性格に注目して図像や文字情報を政治的・社会的背景を視野に入れて詳細に分析・解釈することによって、屋敷管理や屋敷利用の実態等にアプローチし、都市社会像の一面を抽出することができるとした。さらに、城下町絵図の作成と絵図の役割にアプローチするための絵図群の新たな分類試案をも提示している。また、城下町絵図の特徴を長期的視点からとらえ、都市形態の展開を転封等の政治的事情にも注目して見直す必要性を指摘しており、単に絵図の系統を中心にした研究から絵図の利用と主題に注目して、矢守一彦の城下町プラン論や城下町絵図の分類の再考を目指そうという意欲的なもので、歴史地理学における城下町絵図の新たな意味の発見からそれらを活用した新しい方法論につながる可能性を秘めたものといえよう。

## 3) 近代—東アジアの都市図

近代に関しては従来あまり注目されることの無かった東アジアの都市図が取り上げら

れ、伝統的な都市図から近代的な都市図への変容を捉えている。

まず、渋谷鎮明氏の「朝鮮半島における近代都市図作成の展開—朝鮮全図に掲載されたソウル都市図を中心に—」は、小縮尺の朝鮮全図に割図として付された民間作成のソウルの都市図を中心にして、その特性と時代的变化を把握したもので、韓国併合前後までに作成された「都城図」の系譜を引く都市図とその変化を明らかにしたものである。1903年刊行の京釜鉄道株式会社「韓国京城全図」には陸軍参謀本部による近代的な測量成果が反映された可能性があるとの指摘は、その作成の背景にある政治的コンテクストに注目したものとと言える。

また、小島泰雄氏の報告「中国都市図の近代的転回」は、成都の都市図を例に伝統から近代への転回を「成都図モデル」とし、その図的变化から測量・製図・印刷・利用といった諸側面から中国における都市図の近代的展開を多面的にとらえたものである。そこでは、近代的地図作製の技術の継承と地図思想の変化が光緒20年代に生じ、近代的な都市図の叢生をみたことが示唆された。絵図・地図そのものを書誌学的ないし史料学的に研究する視角からの基礎的かつ重要な研究成果である。

## 2. 「新しい方法論，思想論の地平」をめざして

### 1) 新しい方法論，思想論の地平

上杉和央氏の報告「地図史における森幸安の再布置」は、地図の作成・筆写を廻る文化的な関心を背景に、近世にかくも多くの絵図・地図が作成されたり写されたりしたのか<sup>13)</sup>、その中心であったともいえる森幸安にせまった大変興味深いものである。長久保赤水に先立って幸安が「日本分野図」に経緯線を採用したことから、赤水の「改正日本輿地路程全図」に至る過程を明らかにした。さらに

幸安の地誌「日本志」の構想とその展開を明らかにし、緯度により風土を説明するものであるとし、「日本分野図」が幸安の壮大な「日本志」の構想の一環として作製されたと指摘するとともに、ナゾのカルトグラファー<sup>14)</sup> 幸安を日本地図史上に位置づけた。また、地誌作成者でもある幸安の日本図にどのようなプロセスで経緯線が採用されたのかをはじめとして、氏の研究は近世における地図の書誌学的な研究の視角が基盤となっている。

また渋谷氏や小島氏の報告は、絵図・地図の史料論的な視点に立脚するといえるが、ややもすれば日本の絵図・地図に関心が集中しがちである中で、海外の絵図・地図製作にも目を向ける必要性を感じさせ、こうした視野の拡大が絵図・地図をめぐる新たな方法論、思想論への展開につながっていくことが期待される。

### 2) 絵図・地図の読解と空間認識

趣旨説明の中で、1980年代以降は、絵図・地図の史料批判、図像分析、コスモロジー解読など、それら資料の意味そのものを追究する研究が展開され、絵図の系譜的研究や、単なる歴史地理学の資料として絵図・地図を利用する実証的研究に留まらず、それらの意味論的研究へと大きくパラダイム転換を遂げたとの指摘がなされている。このことは、近年の絵図・地図研究の傾向として、絵図・地図に描かれた図像に対する関心が比較的強く、絵図自体の読解・解釈を基点にしていることがうかがえ、これには「過去の想像ないし認識された世界」をどのように記号論的に読み解いていくかを中心に研究を行った葛川絵図研究会の刺戟や金田氏の一連の文脈論的研究が大きく影響している。このことに関連しては必ずしも今回のシンポジウムにおける報告の中では中心的には触れられなかった。しかし、絵図・地図に表われた空間認識の解釈をめぐる問題を措いては「新しい方法論，思想



論の地平」は開けないと考えているので、以下に日ごろから感じている素朴な疑問についてすこし述べてみたい。

まず、資料としての絵図・地図を理解する際の、認識主体に関わる問題である。資料としての絵図・地図を読解する際には、絵図・地図の歴史学的な理解が基礎として必要なことは言を俟たない。その際に歴史学的理解を試みる主体（つまり現代人たるわれわれ）の理解<sup>15)</sup>が、その歴史的理解の根底にあるということに留意すると、記号論的・意味論的なアプローチは、当該の絵図・地図の基礎的な理解は現代に生きる者による理解であるという制約を和らげるための有効な方法ではあるが、それでもやはりどのようにすれば当時の作成主体の認識（空間はもちろん、その空間認識の基礎となる社会や生活環境等に関する理解や認識）に即して、絵図・地図を理解し叙述できるのか、つまり現代に生きる我々が見ているという限界をいかにすればブレークスルーできるかという素朴な疑問が残るのである。この素朴な思いは、既に20年余り前の葛川絵図研究会の『絵図のコスモロジー』においても言及されていた<sup>16)</sup>ことではあるが解決は難しい。

このことには絵図の図像の解釈学<sup>17)</sup>の深化が必要であることを示唆している。絵図が絵画的色彩を豊富に含む場合、そこに描かれた個々の画像についての理解・解釈には、図像のみならず構図や描き方・表現方法及びその背後にある思想なども含めて日本絵画史等の成果の上に解釈することが必要である。それでも、雪舟の「天橋立図」についての景観表現をめぐる評価にも差がある<sup>18)</sup>ことも考慮すると、やはりこの景観描写や表現の解釈があくまでも現代人のものであり、現代人による読解である点是否定のしようがなく、素朴な疑問が残ることになる。つまり、仮に描写や表現の目的を説明できても、我々は当時の作成者や使用者と共通の文化に立脚してい

るわけではないことを思うと、当該の空間に対する彼らの認知・認識やそれに付与された意味や解釈は、実は我々の復原や解釈したものとは全く異なり、思いもよらないことが潜んでいる可能性があるのではないかという不安を拭えないのである<sup>19)</sup>。したがって、あくまでも仮説に留まることを自覚する必要があるのではないかと思う<sup>20)</sup>。

## おわりに

趣旨説明の中で世紀の転換期からの研究は、情報化社会を反映して絵図・地図のデジタルデータベース化やGIS利用など、パラダイムを逆戻りさせるベクトルが強く働いているとも指摘されているが、必ずしもそう捉える必要はない。なぜなら、絵図・地図の画像データベース化の進展は、直接原図を展開して実見する必要性を減じ、展開による図の痛みを防止することができ、文化財保護、資料保護の観点から意義の大きな点であり、また展開する場所の制約も受けず、十分に時間をかけて見ることができ、さらに大きさも自在に変えて観察できるなどハンドリングに優れることから、従来では難しかった詳細な観察が容易に行えるようになり、図像の読解にとってもプラス面は大いにあるだろう。GISの利用が必ずしも全ての種類の絵図・地図に有効であるとは思われないが、地図としての精度の検討や歪みの特性の分析、さらにはそれらを通じて作成者（あるいは作成された社会における）空間認識に関しても何らかの新たな知見を得ることができるのではないかと期待される。そのような意味で、むしろ絵図・地図のデジタルデータベース化やGIS利用といった動きは、さらなるパラダイム転換の契機となる可能性を秘めているともいえ、新たな方法論につながるものと積極的に評価したい。

シンポジウムの最後に上で述べた空間認識の問題と図像の解読に関連して議論の俎上に

のせることに言及したが、時間の都合もあり、議論できなかったことは残念であった。図像の解説における現代人のバイアスをどのように位置付け、どのように克服するかについての検討が深まることより、歴史地理学における絵図・地図の意味の再発見から新しい方法論、思想論の地平を切り開くことへとつながっていくと思う。いずれかの機会に議論がなされることを期待したい。

(奈良女子大学文学部)

#### [注]

- 1) 歴史地理学会編『地図と歴史地理（歴史地理学紀要21）』, 1979。
- 2) 長谷川孝治・小野田一幸「(シンポジウム趣旨説明)「歴史地理学における絵図・地図」によせて」, 第52回歴史地理学会大会予稿集, 2009。その成果である『空間認知の歴史地理（歴史地理学紀要27）』, 1985。
- 3) 葛川絵図研究会編『絵図のコスモロジー 上・下巻』, 地人書房, 1988・89。
- 4) 小山靖憲・下坂守・吉田敏弘編著『中世荘園絵図大成』, 河出書房新社, 1997。
- 5) たとえば、鳴海邦匡氏の測量技術に着目した諸研究はその一例といえよう。鳴海邦匡『近世日本の地図と測量：村と「廻り検地」』, 九州大学出版会, 2007。
- 6) 金田章裕・石上英一・鎌田元一・榮原永遠男編『日本古代荘園図』, 東京大学出版会, 1996。
- 7) 佐藤信編『西大寺古絵図の世界』, 東京大学出版会, 2005。
- 8) 東京大学史料編纂所編『日本荘園絵図聚影』, 東京大学出版会, 1988～2002。
- 9) 東京大学史料編纂所編『日本荘園絵図聚影 積文編1』, 東京大学出版会, 2007。積文編1は古代で、以下順次刊行予定である。
- 10) 金田章裕『古代荘園図と景観』, 東京大学出版会, 1998。
- 11) 最近では、実景を単純に写したものではなく、現場での部分写生を集めた構想図であり、実はその構成や描法には中国画の影響が大きいとの見方が強くなっている。また、入明により中国山水画の写実性と合理性に優れた点を生かしたものであるとされ、一方では実景に接した印象と感動とに基づいて描かれていると評価されている。成瀬不二雄『日本絵画の風景表現』, 中央公論美術出版, 1998。
- 12) 歴史学研究 841号及び842号の「特集 世界のなかの近世絵図（Ⅰ）・（Ⅱ）」2008。
- 13) 地図の転写に関連して、筆者はかつて大分大学に勤務していた1985年ころに次のような経験をした。町並み調査に関連して訪れた臼杵市立図書館に臼杵藩伝来の絵図類が多数保存されていることを知り、京都大学工学部建築学教室の西川幸治教授の絵図撮影に同行した際にその一部を実見し、国絵図をはじめとする多様な絵図が大量に（1000点以上も）あることに驚くと共になぜこのように大量に絵図類を写したのか、その目的は、また他国の国絵図が容易に写せたのはなぜか、どこからどのようにして「原本」を借りて、どこで（多分、江戸）書き写したのか、つまり上杉氏の研究に倣えば、大名のどのような知識交流のネットワークの中で「原本」を借りて写すことができたのか、などと疑問に思ったものであった。このような問題にも最近関心が向けられるようになっている。
- 14) 矢守一彦『古地図と風景』, 筑摩書房, 1984。
- 15) 石上英一氏の言葉を借りれば、「現在の現実への関わりと参加、あるいは社会的存在としての自己による歴史的・同時代的社会または生活・人間への認識という相での理解」ということになる（石上英一『日本古代史料学』, 東京大学出版会, 1997）。
- 16) 「われわれが慣れ親しんでいる考え方とは異なった世界像によって構想された絵図も多くある。それらを、われわれの基準のみに従って解説するなら、多くの有益な情報が生かされないままとなる」と述べている（前掲3）上巻, 38頁）。また、葛川絵図研究会では図像の解説における現代人のバイアスを除去することが意識的に試みられた。
- 17) 歴史学では黒田日出男氏による優れた成果

も現れている（黒田日出男『境界の中世 象徴の中世』，東京大学出版会，1986，同『姿としぐさの中世史：絵図と絵巻の風景から』，平凡社，1986，など）が，特に歴史地理学の側から研究は必ずしも十分とは言えない。

18) 注11) 参照。

19) 同様のことは，1984年度の第27回大会をうけた『空間認知の歴史地理（歴史地理学紀要27）』，の「解題—歴史地理学研究におけ

る空間認知—」の中で竹内啓一が指摘している。

20) 筆者も以前からこの点の不十分さを痛感し，美術史研究者との共同研究を試みたことがある（中村興二・出田和久『文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書 基盤研究（C） 荘園絵図のイコノグラフィと景観表現に関する美術史的研究』，京都市立芸術大学，2003）。